

## 大学中退して仏道修行専念

しかし、敷かれたレールの上を走っていく事に疲れ、疑問を感じたのか、突然大学を辞めて、仏道修行に専念し出す。

次の文は先のものに続くものだが、読んでわかるようにそこに何の脈絡も無く、まさに突然、蛍雪の功での猛勉強から大きく方向転換し、大学を辞め、仏道修行に専念していつているのだ。『三教指帰卷上』によると、

ここに一人の僧侶がいて、わたくし空海に虚空蔵求聞持法について書かれたものを見せてくれた。そこには「もし、決められたやり方に従って、虚空蔵菩薩の真言100万遍を誦すると、一切の教えの文とその意味を暗記することが出来る」と説いてあった。それで釈尊の誠なる言葉を信じて、木をこすりあわせて火をおこすように努力精進して、阿波の国（徳島県）の大滝嶽によじ登り、土佐（高知県）の室戸岬で修行に励んだ。わたくし空海の修行に、谷がこだまするように仏様が感応して下さって、虚空蔵菩薩の化身である明星がわたくしの中に飛び込んで来て姿を現された。

とある。仏道修行へ専念することになったのは、密教の秘法といわれる求聞持法修行が契機になったというのはあるが、修行自体は、そのとき突然始めたわけではなく、それ以前から修行していたのだろう。

たまたま初めて山に入って、そこで一沙門に出会って求聞持法を教えてもらった、という事は考え難い。また、それが山中ではなく、奈良の大寺あたりだったとしても、いきなり来た青年に求聞持法を伝えたとは思われない。

後に、入唐した際に恵果阿闍梨が新参者の空海に密教を授けてくれたときは事情が全く違うのだ。

この山中に於ける仏道修行というのは、それより先に活躍していた役行者に代表されるように、奈良時代から平安時代にかけても、自然の中に在って修行する者達が多くいたようで、空海もそうした人々に倣うかたちで修行に励んで

いたのだらうと思われる。

さて、ここまでの空海の動きというのを親の立場で考えてみると、15才で手元を離れた我が子だが、それは、将来一族をも担うための準備のためであり、可愛い子には旅をさせろといった心持ちで送り出し、その後は自分たちの知る神童よろしく勉学に励み、順調に大学に進んでくれたので、あと数年もすれば、官吏になり、親としても一安心だ、という所まで来ていた。それなのに、急に大学からドロップアウトしてしまい、一体我が子はどうしてしまったのだ、というのが正直な所だらう。

空海の方は、そんな親に対して何の悪びれた様子も見せていない。

この時期、空海は地元である讃岐を始めとする四国、奈良、さらには後に真言密教の聖地となる高野山のある和歌山県などの山々で修行に励んでいた事がうかがえるが、そういった状況も、親としては息子が大学を辞めただけでなく、きょうは何処の山の中にいるのか知れない、消息不明の放浪者になってしまったと、悲嘆にくれたのではないだらうか。

その間、儒教、道教、仏教という3つの教えを比較して論じ、仏教の勝れている事を説いた『三教指帰』を24才の時に書いている。

これは空海の出家宣言の書で、家族親戚に宛てて書かれたものとされる。歴史から、そしてそれまでの環境から姿を消し、放浪していても、家族とは完全な没交渉というわけではなかったようだ。

もっとも、この辺りの事情を空海自身の立場になって愚推してみると、大学を辞める前もこのまま進んでいいのか、自分の進むべき道は何処にあるのかと煩悶しながら、ある種、勉学に我を忘れるほど打ち込む事で迷いを打ち消さんとしていたのであろう。片時も無駄に出来ないという必死な状況下では、親に対する思いも、あったにしても後回しであったか。

そんな日々の中、出会った求聞持法と言う密教の秘法。その行の中で経験し

た神秘体験というのは、自分の思いを満たしてくれ、進むべき道を照らす一筋の光を見つけることが出来た喜びで小躍りしたくなるほどであったらう。

やっと見つけた、一筋の光を噛み締めながら、それを頼りに、さらに修行に励む。また、自分の見つけたその光の源を探ろうと言う意味もあったのであろう、この時期、山から下りては先の奈良の都の寺などに赴いて、経典などをまたむさぼり読んでいる。